

# 語る 伝える

川崎医療福祉大 諏訪利明准教授(59) 岡山北区

自閉症の人たちの行動は、しばしば周囲を戸惑わせてしまう。誰かにあいさつをされても好きなキャラクターに目を奪われて、その人には見向きもしなかったり、会話の途中で思いもよらない方向に注意がそれてコミュニケーションが円滑に図れなかったり…。  
こうした特異に見える行動を取るのにはなぜだろう。生まれつきの脳機能障害が原因とされる自閉症の人たちは、そもそも物事を感じる方や捉え方が違う。大切なのは、自閉症の人たちの「学習スタイル」にどれだけ合わせた支援ができるかだ。それがうまくいけば彼らの理解は進み、行動面も変わってくる。  
では、学習スタイルとはどのようなものか。代表的

## 自閉症の人は捉え方が違う。学習スタイル合わせた支援を。



川崎 諏訪

な例で言えば、自閉症の人たちは絵や写真といった視覚的な情報は理解しやすい半面、耳から入る情報を整理するのは苦手だ。一般論で物事を考えたり、たくさんある情報を要約したりする作業も難しい。  
例えば「靴はどんなものか」と尋ねると、「履くもの」という答えではなく、「この靴のことが」と返す

てくる。「あなたが小学校の入学式で履いていた靴だよ」と具体的に説明して初めて答えられる。また、母親から「きょう学校はどうだったの」と聞かれた子どもは朝、学校のげた箱の所から、その日に起きたことを全部思い出して、結局何を話せばいいかわからなくなってしまう。質問する際は、具体性が欠かせない。

このように、学習スタイルは共通性があっても、細かな部分では一人一人異なり、できるできないの凸凹もある。それぞれの人が何

学習には視覚的な情報の提供が有効だが、それだけでは十分ではない場合もある。  
自閉症の人は計画を立て、見直しを持って取り組むのが苦手なので、分かりやすいように予定表を作ってもらえることがある。ところが、ある男児に青、黄、赤で色分けした予定表を渡すと、即座に紙を裏返して「ルーマニア」と書いたという例がある。男児は予定表と理解できず、ルーマニアの国旗と捉えてしまった。目の付け所が支援者の意図と全然違っていたわけだ。

このように、学習スタイルは共通性があっても、細かな部分では一人一人異なり、できるできないの凸凹もある。それぞれの人が何

### 記者の一言

諏訪准教授は、自閉症の人たちの特性を「独自の文化」とも表現した。一見特異に映るさまざまな言動。その背景に、当事者ならではの理由があることをきちんと理解していなければ、彼らの力を引き出すことはできない。  
大事なのは、すぐに相手を拒絶するのではなく、まずは知ろうとする姿勢を持つことだろう。専門家だけでなく、そんな隣人が地域に増えていけば、自閉症の人たちが持つ文化はもっと豊かになるはずだ。  
(安部晃将)

「す」ではなく、彼らの力をどう引き出すかという発想で、諦めずにじっくり向き合う姿勢が大切だ。  
彼らは自分の特性を理解し、分かりやすく教えてくれる人たちに会えるのをきっと待っていると思う。そういう存在が今後増えていくことを、支援者の一人として心から願っている。

「語る 伝える」では、心に残る講演の要旨を、記者の思いとともに紹介します。(随時掲載)